

月と首長竜

伊地知克介

【登場人物】。

女

旅券不所持で拘束され、記憶喪失を主張している

博士

男性 心理学者として難民認定にアドバイザの立場で関わっている。

ヨーロッパのどこかの国郊外にある博士の隠れ家。

テーブルをはさんで二つのいす。テーブルには酒と二つのグラス。

女、登場

女

車の中で森の夢を見た。日差しが木の葉越しに秋の地面に落ちている。地面に重なった落ち葉の間を、一匹のリスが木の実を抱えて運んでくる。リスは落ち葉の隙間に黒い土を見つけて、穴を掘る。冬の間の食料として木の実を隠しておくためだ。だがその作業の途中で一本の枯れ枝を踏み折ってしまう。リスは自分が立てた思いのほか大きな音に驚き、逃げ去る。置き忘れられた木の実が岩の上に転がる。リスはよく、埋めた場所さえ忘れてしまうのだ。埋め損なつた実のことなど、覚えていないに違いない。岩の上の木の実は、リスの栄養源にもならず、樹木にもならず、残念なかたちですつと岩の上にあるだろう。森を吹き抜ける風が、木々をざ、ざ、ざ、と鳴らして、私は枝の間から空を見上げた。そして目覚めた。そこにいる私は、森を遠く離れ、どこかへ車で連れて行かれるところだった。そのどこかが「博士の隠れ家」だと気づき、私はさつき見たおびえるリスがいまの自分の姿だと気づいた。

女
博士

女
博士

女
博士
女
博士

博士

博士、登場

記憶喪失って、そんなこと誰が信じるんですか。

(横を向く)

頭に傷はない。だいたい、健康診断を拒否しているんだから詳しく調べようもないじゃないですか。しかもハンガーストライキなんて。十日間もですよ。命に関わりますよ。

(うつむく)

難民についてのこの国の情勢はデリケートなんです。いまの政府は難民に寛容な政策を採っています。難民なら幅広く受け入れようとしている。でも新しい大統領がもうすぐ就任する。彼が難民の入国を制限しようという考えの人なのはニュースで見ているでしょう？ パスポートを持ってないあなたの立場はとても危ういんです。ましてテロリストも少なくない。あなたは、凶悪なテロリストではないか、と疑われている立場でもあるんですよ。

(博士に向き直る)

私はあなたの敵じゃない。

(黙って見つめる)

あなたはもしかしたら、この国の政府と利益が対立する存在なのかもしれない。だとしても、だとしてもですよ。私は民間人なので、逮捕したり、取り調べたりする立場じゃない。相談してもらえたらいいんですよ。あなたがテロリストでさえなければ、私はあなたの味方です。人に聞かれちゃいけない事情があるのなら、私にだけ話して

女 博士
女 博士
女 博士
女 博士
女 博士
女 博士
女 博士
女 博士
女 博士
女 博士

もらおうと思つて、ここに連れてきたんです。味方なんです。(酒を二つのグラスにつぐ) さあ、これでも飲んで、リラックスしてください。
(のまない)
楽器も返します。
(反応する) ありがとう。
(ウクレレを渡して) そんなに大事なもので、あなたのこと、うわさしてたよ。
誰が?
見張りの警察官さ。あなた、博士だろう。
そう呼ばれています。
ここは「博士の隠れ家」?
そう呼ばれていますね。
彼らはあなたをこういうふうに言つてたよ。
えーと、「100%ヘンタイ」
心外だな。
違うのかい?
もちろんです。私は10年ここで働いている、まじめな心理学者です。0・01%もヘンタイじゃない。大いに心外だ。
ビザを持つていない人間が送られてくると、博士が調べる。ときどき、博士の隠れ家に連れて行く。そして、裸にする。
ばかな。
1回もそんなことしてない?
1回もだよ。

女 博士
女 博士
女 博士
女 博士
女 博士
女 博士
女 博士
女 博士
女 博士
女 博士

本当に?
本当だ。
誰か、見たやつがいるみたいだよ。
見られてたのか:
マジか。なにが0・01%だよ。
理由はある。
あなたがヘンタイだからだろ。
違うよ。言えないが、それ以外の理由だ。
信用できないね。
私はあなたに協力することができる。
協力。
あなたが記憶喪失を主張し続けると、どんな立場が悪くなる。難民ではなく、不法移民ではないか、またはさらに悪く、テロリストではないか。
3種類?
え?
人を3種類に分けるってこと? 難民、不法移民、テロリスト。
4種類ですね。この国の住民、難民、不法移民、テロリスト。
同じ人間じゃないか。
私はあなたがこの国の住民として暮らせるようにできるかもしれない。
そもそも、この国の住民かもしれないじゃないか。記憶がないんだから、わからないだろう。
この国の住民じゃない。明らかに外国人だ。

女 博士

記憶を取り戻す助けになるかもしれない。

それって必要？

そうそう。時間を計りますので、なるべく早く答えてください。

青、とか？

え、赤、と言え、

今から私が言う言葉から連想する言葉を言っ

てください。

考えずに、すぐに言っ

て。たと

えば、赤、

青、とか？

そうそう。時間を計りますので、なるべく早く答えてください。

え、赤、

今から私が言う言葉から連想する言葉を言っ

てください。

考えずに、すぐに言っ

て。たと

えば、赤、

青、とか？

そうそう。時間を計りますので、なるべく早く答えてください。

え、赤、

今から私が言う言葉から連想する言葉を言っ

てください。

考えずに、すぐに言っ

て。たと

えば、赤、

青、とか？

女 博士

そうかなあ。

いきますよ。

青。

海。

魚。

鳥。

英語。

ロシア語。

写真。

カメラ。

熊。

羊。

砂漠。

沈黙。

森。

家。

石油。

墓堀。

時計。

時間。

開発。

破壊。

オルガン。

教会。

ラグビー。

学校。

フェイスブック。

ハンドブック。

アップルコンピュータ。

女 博士

女 博士

女 博士

女 博士

女 博士

女 博士

女 博士

女 博士

女 博士

女 博士

女 博士

女 博士

女 博士

女 博士

女 博士

女 博士

女 博士

女 博士

女 博士

女 博士

女 博士

女 博士

女 博士

女 博士

女 博士

女 博士

女 博士

女 博士

女 博士

オレンジコンピュータ？

ドライフルーツ。

拷問。

東京五輪最終聖火ランナー。

サカイヨシノリ。

えっ。

違った？

いや…

こんなんで何がわかるの？

わかりますよ。記憶喪失なんかじゃないこと。

なにか、私に隠していること。隠しているん

でしょう。正直に言ってください。

記憶がないのは本当よ。

墓堀、破壊、拷問。普通の市民なら出てこな

い言葉が多いのが気になりますね。

ロックンロールが好きでさ。

は？

歌詞にちよつといかつい言葉が出てくるのは、こ

の種の音楽の特徴でね。

この国では最近まで制限されていました。

そうだった？

今の大統領が解禁しましたが、選挙で負けまし

たからね。新しい大統領はおそらくまた、ロ

ックを規制しますね。

そうなの。

あなたが外国人なのはたしかだ。

そうみたいね。

記憶がないのに、その種の歌の歌詞はなんで覚え

ているんですか。

歌詞は覚えるもんじゃない。歌えば口の中に刻み

つけられるもんでしょ。

テロに関わった記憶は喪失して、歌の歌詞だけ残

ったっていうのか。

だからテロには関わっていないって。

なんで断言できるんだ。記憶がないんだらう。

記憶がなくなつて、私は私が、どんな私かはわか

つてる。人間を4種類に分けたりしない。

今ある秩序を破壊して、すべてをフラットに

しようという考え方ですね。テロリスト的で

すね。

自分が何言ってるのか分かってんの？

記憶をなくしたつてのはうそでしょう。

記憶は本当になくしたの。

そんな都合のいい話があるか。

(ふてくされて横を向く)

(なだめるように) 私は敵じゃないって。

(後ろを向く)

敵じゃないんです。私は味方なんですよ。

あんたこそ、信用できないね。

なんだって。

博士、女に近づき、髪を後ろからつかむ。

なにすんだよ。

女立ち上がって、博士を突き飛ばす。博士、吹っ飛ぶ。

女、隠し持っていた小瓶から博士のグラスの中になにか入れる。博士、起き上がる。

博士 わかった。

女 なにがわかったんだ。

博士 ウィッグじゃない。

女 は？

博士 留置場であなたの髪の毛を寝てる間に採取して、DNA鑑定したんだ。

女 なんだって。あたしの髪の毛を？

博士 髪の毛じゃなかった。

女 え？

博士 特殊な繊維質の人工物で、誰も見たことがない

ような組成の物質だった。外国製の特殊なウ

ィッグをつけているんだ、とみんな思ってる。

繊維に含まれていたのは、大量の葉緑素。

女 このヘンタイ。

博士 十日間、何も食べてない。水と空気だけ。窓

の近くに座っていただけなのに、そんなに力

が出せるのはなぜだ。あなた、どういう人間

なんだ。答えは一つだ。

女 なんだい。

博士 (グラスをつかんで飲み) あんた、光合成を

しているんだね。

博士 は？
植物なんだ。ついに見つけた。植物人なんだ

女

ね。光合成をして生きてるから、何も食べる必要がない。動物から進化した人類とは違う。植物から進化した植物人。

(笑い出す) 博士、あんたを見くびってたよ。

まさか、見破るとはね。サルから進化した動物人のあんたたちの頭じゃ、想像もできないと思ってたよ。そうさ。あたしたちはシベリアの森の中で、植物から進化して、あなたたちに知れないように、独自の文化をつくってきた、植物人だ。

マジか。

女 え？

博士 そんな、簡単に秘密を明かしていいのか。

女 どうせあんたはこのことを誰にも言えやしない。

博士 なぜだ。

女 死ぬからさ。その酒をのんだだろう。

博士 毒？

女 気の毒だね。

博士 性格悪い。毒入れたんだ。なんてことだ。

女 味方だって言ってるのに、ひどい。

博士 あたしたちは平和主義の種族だ。お互いに殺し合わないし、動物だって殺さない。しかし私たちに危害を加えようとする動物人だ

けは別だ。殺していいことになってるのさ。

女 そこに入れた猛毒が、すぐにあんたをあの世

に連れて行ってくれる。苦しみは長くはないはずさ。

博士 女 博士 女 博士 女 博士 女 博士 女 博士 女 博士 女 博士 女 博士 女 博士 女 博士 女

ひどいよ。
というか。

え？

なんで死なない。

死なないよ。

なんで毒が効かないんだ。

効くわけない（もう一口飲んでみせる）。

なぜ。

なぜって、わかるだろう（飲み干す）

マジか。

おれも植物人だ。

あんたも植物人？聞いたことがある。動物

人の社会に潜入してるやつがいるって。

おれがそれだ。

早く言ってよ。

言えないよ。あんたが動物人かもしれない

以上、言えないだろ。正直に言ってもらうか、

裸にするしかない。

あたしが植物人だと。

そうじゃないか、と思って連れてきたんだよ。

記憶喪失のふりなんて、不自然だしさ。

いつもはこれでなんとかやってたんだけどね。

あんた、何年、こっちの世界に。

もう110年だ。芽生えて21年目でこっ

ちに来てずっとだから。あんた、芽生えて何

年だ。

161年目かな。

失礼しました。先輩。

博士 女 博士 女 博士 女 博士 女 博士 女 博士 女 博士 女 博士 女 博士 女 博士 女 博士 女

植物人らしい態度だね。感心感心。

もう言葉は忘れました。潜入が長すぎて。

苦労したんだろうね。

そりやもう。動物人、ひどいっすからね。

もう110年の苦労をしゃべろうと思った

ら、一晩二晩じゃ足りませんよ。

よくバレなかったね。

一番危なかったのは、ベルリンの壁崩壊の

時かな。動物人の暦で1990年？

あのときドイツに？

動物人の歴史が大きくかわる一瞬ですよ。

見に行くじゃないですか。ほら、当時は、東

西対立が私たちにも脅威だったから。

核戦争が起きたら、植物人の世界にも見えな

い毒が降り注ぐだろうからね。

核戦争がなくなる、これからそんなものにお

びえる心配はないんだ。そう思ったらうれし

くなくて、調子に乗って壁を壊すのに加わっ

ちやって。

つかまったの？

騒動に巻き込まれてやばそうだったから、

しばらくモミの木に化けて隠れたんですよ。

そしたらクリスマスツリーにされちゃって。

あらあら。

つかかったな。あのとき、伝書鳩を逃がして

しまったんですよ。

それで連絡が取れなくなっただ。

先輩、教えてください。おれたちは動物人の

女 博士 やつらよりずっと進んでますよね。もちろんさ。戦争も起きず、差別もない社会をはるか昔に作り上げた。

女 博士 そうだ。動物人はまだそこまで進化していない。

女 博士 医学も進んでいる。健康で550年は生きられる。

女 博士 最近は600年越えも珍しくない。

女 博士 そうなんですか。

女 博士 動物人も詩をつくるけど、私たちほどは美しくつくれない。動物人は仮面をつけたり、メーキャップをしたり、苦勞して演劇をやっているけど、私たちは大抵のものに化けられるから、もつと質の高いものを演劇祭に出せる。今でも毎月、演劇祭を開いているんですか？

女 博士 もちろんよ。私たちは動物人たちより、ずっと進んでいる。

女 博士 それなのに、これですよ（携帯電話を見せる）何？

女 博士 通信技術と移動手段だけはなんでこんなに遅れを取っているんです。やつらはこれで世界の裏側の動物人とでもしゃべれる。写真だつて動画だつて送れる。

女 博士 知ってる。

女 博士 なんでおれたちは、まだ伝書鳩？

女 博士 世界の裏側に植物人いないし。そんな遠くの相手と話したいと思わない。伝書鳩で十分。

女 博士 やつらは空を飛ぶ機械をつくった。宇宙に行く機械も。

女 博士 知ってる。宇宙の方は乗ってないけど、空飛ぶ方は彼らの暦で1960年代からよく乗ってる。

女 博士 おれたちはなぜまだヘラジカのソリに乗っているんです。

女 博士 ヘラジカのソリで十分よ。

女 博士 え？

女 博士 そもそもみんな遠くに行きたいって思わないんだよね。思ったとしても、彼らよりずっと長く生きられるんだから、急ぐ必要ない。

女 博士 ここにずっといて、森に連絡ができないと、そうのんびりした気持ちにはなれませんか。

女 博士 それはそうだろうね。ここにはいつから。

女 博士 こいつに化けてもう10年かな。動物人、頭悪いんで、なんとかだましました来ただけ、そろそろどっかに移ろうかな、って思ってたんです。

女 博士 気の毒だったね。

女 博士 植物人としやべったのもう50年ぶりくらいです。森ではおれ、枯れたと思われてるんじゃないかな。

女 博士 だろうね。

女 博士 先輩はなんでこの国に？危険ですよ。この国のやつら、自分たちと違う存在に変に敏感だ。やたらにつかまえたり、殴ったりしている。

女 博士 あたしは「音楽屋」だよ。
女 博士 おー。

女 博士 知ってるの？

女 博士 知ってますよ。音楽屋に会いたいってずっと思ってた。だって、動物人の社会にいて、伝書鳩をなくしたおれには

女 博士 音楽屋に出会うしか、植物人と話すチャンスがないものね。

女 博士 音楽屋、本当にいたんだ。動物人たちはたしかにおれたちとは違うテイストの面白いものをつくりますよね。

女 博士 モーツアルト以降だけだね。

女 博士 音楽屋はそれを集めて持ち帰るために、何年かに一度だけ、森から外に出る。密かに録音して持ち帰られたそれは植物人たちの夜を静かに彩る。月の光の中の楽しみになる。

女 博士 そうね。それは素敵なこと。

女 博士 その素敵なことのために命をかけるんですか。

女 博士 命がけでやる価値のある仕事さ。

女 博士 本当ですか。

女 博士 あたしもやり始めたころは半信半疑だった。彼らの暦で1960年代まではね。

女 博士 どこで音楽を集めていたんです。

女 博士 忘れたけどヨーロッパでさ。若いミュージシャンがギター弾きながらなんかつくってた。その曲が良くてさ。あたし、思わず、

女 博士 彼のいる部屋の窓のそばまで上ってって。何階だったんです。

女 博士 3階。

女 博士 泥棒じゃないですか。よく無事でしたね。彼に見つかりそうになって、私はツタに化けたのよ。

女 博士 そりゃ良かった。ツタならクリスマスツリーにされる心配はないですからね。

女 博士 それで、彼が寝ぼけて曲が変な風になりそうになったんで、そつと窓から歌って修正してあげたりしたのね。

女 博士 歌うツタ！怪しいっすね。曲つくるの手伝ったんだ。

女 博士 そしたら意外にいい曲になっちゃってさ。

女、歌う。

女 博士 その歌、聞いたことがある。

女 博士 これが売れたのよ。マジか。

女 博士 それがあつたもんで、レコードショップとかコンサート会場回るだけでは足りなくなつてね。直接ミュージシャンのそばで、楽器を演奏するようになった。彼らを手伝つたり、一緒に演奏したりして。空飛ぶ機械に乗って海外ツアーにも一緒に行つたわ。

女 博士 ニューヨーク、西ベルリン、東京。

女 博士 大胆だな。ちよつと前まで家のツタだった

のね。

なんとかならないんですか。

なんともならない。科学者たちがいろいろ試したけど、全部失敗した。

あいつらのせいじゃないんですか。動物人たちが、化石燃料を燃やした。いまでも燃やしている。地球の温度がどんどん上がっている。シベリアも恐らく。そのせいでしょう。

それはそうかもしれない。

彼らの暦で、1986年のあれでは？ウクライナで起きた最悪の出来事。なんとかいう見えない毒が森を少しずつむしばんだんじゃないですか。

それも、そうかもしれない。

彼らに仕返しして、それから滅びてもいいんじゃないですか。

あんた、彼らの考え方に毒されてるねえ。え？

そんなの植物人の考え方じゃない。

こつちが長いんで。

仕返ししたところで、私たちは助からない。一緒に滅びるだけ。何の意味もないでしょう。

おれ、受け入れられません。

あたしも、最初は無理だと思った。受け入れられないと思った。あたしたちの世界、こんなに美しい世界がなくなってしまうなんて、終わってしまうだなんて。でも、こう考えるようにしたのよ。かつて、恐竜たちは隕石の

博士

女博士

衝突で滅びた。太陽が隠され、地面が冷え切り、寒さと飢えに苦しみながら、多くの命が同時に悲惨な死を迎えた。私たちはそうじゃない。静かに、風を感じながら、動物人たちのつくった音楽を楽しみながら、最後を待つ。それは私たちの「スース」なんだ。

「スース」でしょうか。そんなの、「スース」でしょうか。

みんなで決めたんだ。

何度も森に帰りたいと思いました。ずっと懐かしくて。あの静けさ。森の音の記憶を心の奥から引き出して、その音に浸って時間を過ごしました。鳥が飛び立った後、揺れ続ける木の葉のささやくような音。枯れ葉の上を駆け抜けるシベリアリスの足音。こんなうるさい動物人たちの社会に暮らし続けるのは、きつかった。でもここに残ったのは、動物人たちに大きな異変が起きて、森に何かをしようとしたとき、ここにいれば分かる可能性があるからです。その時は、急いでみんなに伝えよう。おれ一人が幸せじゃなくても、森のみんなが幸せなら、おれ一人はいいんじゃないか、そう思っていました。森全体のためなら、おれ一人の幸せなんて、そんなに大きなことじゃない。そう思うじゃないですか。それがおれの知らないうちに、滅びが近づいていたなんて。次の世代が芽吹くのをもう見られないなんて。どうしたら受け入れられるん

女

だろう。
首長竜の生き残りがいたって話があるだろ。
スコットランドの湖に、1匹だけ。

博士
女

はい。聞いたことがあります。

あたしはそれが本当ならいいなあ、って思うんだ。最後の首長竜が、1匹だけ湖にいる。もう仲間はすべて死に絶え、自分が最後の1匹だ。もう滅びの日が来るって分かっている。動物人たちに自分の存在を知られないように、静かに夜だけ湖から顔を出して、日々を過ごす。まるで私たちのようだ。

博士
女

そうですね。

あたしね、私たちの最後もそうであってほしいと思うの。静かな最後。安らかな最後ね。最後の首長竜は、静かな最後を迎えたんでしょか。

女

きつとそうよ。あたしはそう思う。

音楽

女

月の夜。湖をかすかな風が吹き渡っていく。ざ、ざ、ざ。最後の首長竜は水面に顔を出して、最後の夜の空気を思い切り吸い込む。そして、自分の寿命が、今夜尽きると知る。それは種族の寿命が尽きる夜でもある。彼は自分が愛してきた、美しい湖を見渡す。美しい水、美しい森、星がいつぱいの空、自分を見つめているかのような大きな月。彼は最後の二酸

博士

化炭素を思い切り吐き出し、静かに沈んでいく。宇宙の祝福のような美しい水紋が月の光に輝きながら、大きく広がって、広がって、広がって、そして、消える。

女
博士

きつとそうよ。

おれたちもそうやって静かに終われるんでしようか。

博士
女

きつとそうね。
これからどうします？

あたしは帰るよ。みんなの待つ森に。あなたは どうするの？

博士
女

もうその必要はない。

森に帰る必要もないですね。

さっきの連想ゲームをやるう。
え？あれはゲームじゃない。心理テスト…
どっちでもいい。いくよ。雨。

虹。

光。

命。

風。

森。

鳥。

空。

枝。

リス。

女 博士 あんた、動物人になれないよ。根っから、森に住む植物人じゃないか。
女 博士 そうかもしれない。でもこっちが長いんで、動物人を動かすことはできるかもしれない。
女 博士 どういうこと？
女 博士 動物人は最近、遺伝子工学の技術をすごく進めているんです。もしかしたら、助けを求めれば、おれたちの遺伝子を残すことが。
女 博士 そんなの植物人の考え方じゃない。
女 博士 おれ、こっちの方が長いですからね。
女 博士 無理だよ。自分で言ったじゃない。動物人は、動物人同士でだって、信じ合えない。少しでも違いを見つけては、違うものをひどい目に遭わせている。
女 博士 それはそうですが。
女 博士 私たちを助けることは、彼らにはできないさ。
女 博士 そんな：
女 博士 動物人たちも、遅かれ早かれ滅びていく。たぶんジタバタしながら。彼らが私たちを助けて、ともに生きていく未来は（間）難しいだろうね。
女 博士 そんな。
女 博士 あたしたちは、あたしたちの姿のまま滅びていく。それが植物人のありかたなの。
女 博士 受け入れられません。
女 博士 私、森に帰るわ。
女 博士 おれは帰りません。

女 博士
女 博士
女 博士
女 博士
女 博士
女 博士
女 博士
女 博士

幕。

待ってるよ。
ありがとうございます。
このウクレレね。
はい。
この木の種から、私は芽生えた。
マジ？お父さん？
植物としての命はなくなってる。でも、別の命が（鳴らして見せる）。
はい。
楽器として、生きてる。音楽の一部として、生きてる。
はい。
私が言いたいことは分かる？
分かりません。でも、いつか、分かるかも知れません。
森の記憶をけっしてなくさないで。あなたは、どこに行ったとしても、一人じゃない。森の記憶はきつと、あなたの味方になってくれる。あなたは、もうすぐほろびてしまうとしても、世界で一番美しいものの一部分なの。そのことはけっして忘れないで。
音楽大きくなり、女は立ち去る。博士はしばらく考え込んでいるが、やがて、電気を消し、立ち去る。

